# 東欧行政視察記

〈最終回〉

# 勤勉・平和・貿易強国の日本

## 施設整備は大幅な遅れ

横芝町長　佐瀬哲司

いよいよ今回の視察旅行も終りに近づき、今日一日はパリ郊外往復五百キロのバス旅行へ出発した。午前七時にホテルを出発、在仏五年という日本青年のガイドで高速道路に入ったが、日本のように車が多くなく、混雑もしていない。道路の両側は見渡す限りの平坦な麦畑で、五十キロ置きぐらいに農村のような集落があり、その間は驚くほど広大な農地が開けていた。

フランスという国は、国土の七割が平坦地といわれ、三割程度の日本とは比較にならない。

ロワール河流域にあるブロアー城を見学したが、古今東西を問わず、ヨーロッパの貴族階級のぜいたくの限りを尽した姿が偲ばれた。

城の見学を終えて午後五時頃、パリ市内へ帰り、レストラン東京の日本料理に舌づつみを打ちながら、パリ最後のお別れパーティを行った。

刺身・テンプラ・漬物・豆腐・日本の料理は何でも揃っていて、千葉市あたりの料理店で食事をしているような気がした。ご飯はアメリカのカリフォルニア産とのことであったが非常に味がよかった。店員も日本人であり、お客も殆んどが日本人で、他国で食事をしているような気がしなかった。

## ショーも家族連れ

食事のあと全員で、世界で最も有名なナイトクラブというふれこみのシャンゼリーゼ通りにある三大劇場の一つへ、高級ショーの見学に行った。

この劇場の収容能力は二百人から三百人で、入場料は日本円で一人一万六千円、シャンペンとワインがコップ一杯ずつサービスされた。

非常に格式の高い劇場で、ネクタイを着用しないと入場ができないとのことであったが、観客は家族連れが多かった。

予約制の高級クラブのショーを観るような感がしたが、ノルウェー、スウェーデンの若い女性二十名程のダンシングチームの踊りが主で、私共には余り興味が持てなかったし、疲れていたので半分ぐらい居ねむりをしているうちにショーは終ってしまった。

こうして、十二日間にわたる東欧視察の旅はこの日をもって終了した。

## 日本の良さしみじみ

九回にわたり掲載してきた「東欧視察記」も今回をもって終るが、諸外国を歩いて感じたことは、先ず日本の国ほど自由で物の豊富な国はないということだった。

しかしその反面「日本はこのままで良いのだろうか」という一抹の不安も感じた。戦後の敗戦処理がよかったこと、島国であるがために国が分割されなかったことなど幸運な面もあったが、ドイツのように東と西に国が分離された国民は気の毒だ。戦後四十年も経過しているのに、一部分は未だに外国の軍隊の占領下に置かれている現実をみて、日本という国は、四面海であるため国境線が無いような地の利があり、それがために北欧諸国のような緊張感がなく、国民に国をまもろうとする気持ちが薄いのではないかと心配になった。

## メイド・イン・ジャパン

また、日本製の良質な自動車やオートバイ、時計、電気器具といったものが多量に外国へ輸出されている姿も、身をもって体験し、非常に驚ろかされた。この姿をみて、アメリカやヨーロッパのEC諸国との貿易摩擦が国際問題化していることがうなずけた。

また日本は、これらの諸外国と比べて、余りにも人口が多すぎると感じた。日本の人口は、現在の半分の五千万人位になれば、ヨーロッパ諸国と同じ位の密度になり、農業等の耕作面積も外国並となり、交通事故や交通渋滞のない、住みよい国になるのではなかろうかと思った。

日本の国民性として今一つ強く感じたことは、日本人ほどよく働く国民はないということだった。また、家族中心の外国人と比べ、日本人は男性だけの団体旅行を好む特性があるような気もした。

## 先覚者の偉大さ

施設の面では北欧諸国は、自動車等の先進地であるためか、道路の整備は非常に良く、大いに参考になった。特にパリやベルリン等では広々とした道路と街路樹が既に数世前に造られていたという事実を見て、先覚者の構想の偉大さに深い敬意を覚えた。

また、下水道もよく整備されており、日本のような電柱は皆無に等しく、すべて地下埋設になっていた。日本も経済大国になった以上は一日も早くこれらを整備する必要があると痛感した。

主として各国の大都市を中心に、かけ足で廻った中での印象を、思いつくままに記してきたので、不十分な表言もあり、僅かな見聞でものを論じてきたことは軽率のそしりを免れないところですが、こうしたさまざまな体験見聞を今後の町づくりの中で、少しでもいかしていきたいと考えています。

＝完＝